

アクティブ・ラーニングを導入した単元開発とカリ
キュラム・マネジメント能力の向上：
中学校音楽科鑑賞授業を対象として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 藍子, 石上, 靖芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025364

アクティブ・ラーニングを導入した単元開発とカリキュラム・マネジメント能力の向上 —中学校音楽科鑑賞授業を対象として—

Development of a course unit introducing active learning and improvement of
curriculum management ability

— Junior high school music appreciation class —

小林 藍子* ・ 石上 靖芳**
Aiko KOBAYASHI, Yasuyoshi ISHIGAMI

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

要約

本研究の目的は、中学校音楽科の鑑賞授業に焦点をあて、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れたカリキュラム開発、実践、評価を通して行うことで、実践者のカリキュラム・マネジメント能力の向上を明らかにすることであった。その結果、単元レベルでの分析と実践の繰り返しを通して、教師主導の単元構成方法から、生徒主体の問題解決型の単元構成方法に変化し、実践者のカリキュラム・マネジメント能力の向上が確認された。

キーワード：音楽科鑑賞授業、アクティブ・ラーニング、単元開発、カリキュラム・マネジメント能力

1 問題の背景と研究の目的

文部科学省（2016）の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」において、次期学習指導要領の改訂の方向性が示された。その中では、育成すべき資質・能力を育成するための手段として位置づけられているアクティブ・ラーニングの「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の実現を目指すために、学習・指導の改善・充実を進めること及び単元間を有機的に関連付けを図るカリキュラム・マネジメント能力の向上が求められている。

音楽科におけるアクティブ・ラーニングの「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の実現のためには、活動と学びの関係性や、活動を通して何が身に付いたのかという観点から、授業改善を進めることが求められている。「主体的な学び」では、生徒が歌ったり聴いたりすることによって自ら課題を設定し、それを追求していくことが大切であり、音楽によって自己のイメージや感情を喚起させ、自らの力で音楽を形づくっている要素を聴き取って課題を設定し、探究していくことが「主体的な学び」の実現につながる。また、「対話的な学び」では、教師の一方的な授業展開から、グループにおける話し合い活動や全体でのまとめを丁寧に扱っていくことが大切であり、生徒同士の互いのやり取りの中で音楽的な特徴を発見したり、

* 下田市立稲生沢中学校

** 教職大学院系列

共感したりする学びの過程が大切だと考える。「深い学び」は、歌ったり聴いたりするという体験を通して、友だちと協力して学ぶことによって、実際の生活や地域の中でも生かせる力を育てていくことであると考えられる。さらに、音楽を包括的に見ることができ、音楽的な見方や考え方を働かせて音楽と主体的に関わることによって、生涯にわたって自分の人生を豊かにしていく見方や考え方を育てていくことが「深い学び」として考えられる。

音楽科という教科においては、子どもたちが実際に演奏したり、身体を動かして表現したり、体験を通して学んでいくという特徴をもっている。表現領域においては主体的・協働的に学ぶ場面が多い。しかし、一方で鑑賞領域においては主体的・協働的な学びだとは言いがたい状況もある。鑑賞の授業では、曲を鑑賞して教師の解説を聞き、感想を書くという一斉授業の形態が多い。また、他教科に比べて授業時数が少ないことから断続的な授業になりがちであるため、鑑賞時間が確保できないことが要因としてあげられる。

そこで本研究の目的は、安部（2016）、溝上（2014）等のアクティブ・ラーニングの研究を参考に、鑑賞授業に焦点をあて、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた単元開発、授業実践と評価を通して筆者の授業者としてのカリキュラム・マネジメント能力の向上を明らかにすることである。単元開発の際にはタブレット端末を活用し、より生徒の主体性を引き出すことを併せて検討する。

2 研究方法

筆者が教職大学院のアクションリサーチ（実習）において、S市立A中学校で2年間にわたって実践した音楽鑑賞に関するアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた3回の鑑賞授業を通して、どのようなカリキュラム・マネジメント能力の向上や授業観が醸成されたのかを整理する。

アクションリサーチにおいては、図1に示したように、中学校1年生「魔王」、2年生「フーガ ト短調」の鑑賞教材、3年生では鑑賞領域と表現領域を融合させた混声3部合唱「名づけられた葉」の教材を扱い、単元開発、授業実践を通して実証的にその効果を検証する。鑑賞領域を重点においた単元開発とその授業実践には、DVDとタブレット端末を用い、グループ活動の発話からICTの効果を検証する。タブレット端末に楽曲を入れ、自由に繰り返し聴くことができる環境を位置付けた単元を開発した。授業実践に関しては、全ての授業を記録した。また、グループ活動においては、ICレコーダーを使用して各グループの発話を全て記録した。その後、記録は全て文字起こしした。実践の省察はその都度行い、単元終了後に省察記録を書いた。

（1）鑑賞曲『魔王』

平成27年11月11日、16日 S市立A中学校1年生 全4時間（2クラス×2時間）

1年生を対象に『魔王』を鑑賞教材とした『詩の内容と音楽が一体となった歌曲のよさを味わおう』を2時間で構成し実施した。グループ学習ではタブレット端末と拡大楽譜を用い、楽曲の特徴を見つける活動を行った。グループ学習から音楽の要素を知覚しているかを検証する。

（2）鑑賞曲『フーガ ト短調』

平成28年6月8日、10日、15日 S市立A中学校2年生 全4時間（2クラス×2時間）

2年生を対象に「フーガ ト短調」を教材とした『旋律が追いかけるように重なり合っていくおもしろさを味わおう』を2時間で構成し実施した。グループ活動ではタブレット端末と拡大

楽譜を用い、楽曲の特徴を見つける活動からまとめる活動を行った。また、紹介文の分析を通して学習した内容の定着が図れているかを検証する。

(3) 混声3部合唱『名づけられた葉』

平成28年7月6日、7日、13日、15日 S市立A中学校3年生 全16時間（筆者が担当した時間は4時間）

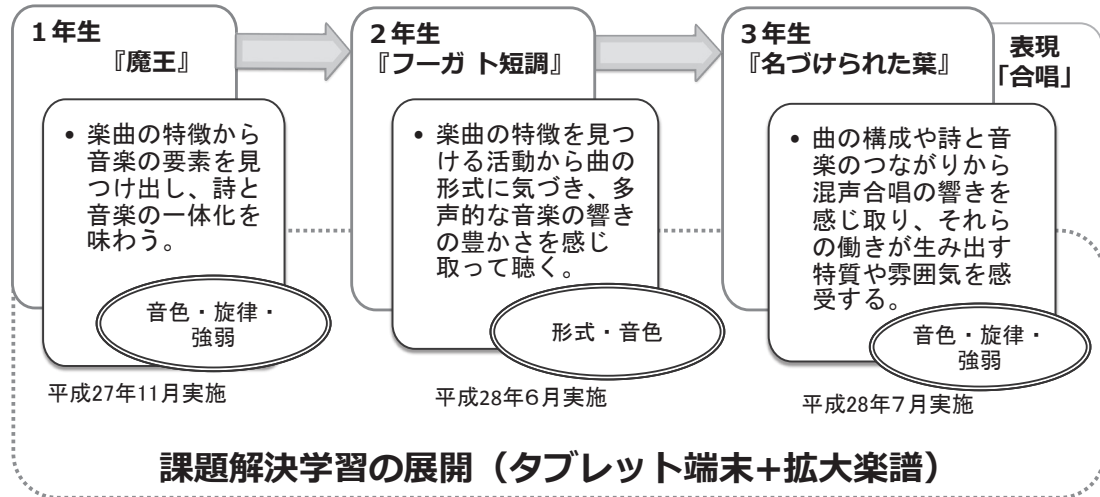


図2-1 各学年の系統性を図った単元開発

表現領域と鑑賞領域を融合させた教材開発を行った。混声3部合唱「名づけられた葉」を教材に、8時間で構成したうちの2時間を鑑賞と位置づけた。楽曲全体とパートごとの音源から曲の特徴を見つけ出し、パートごとに効果的な合唱練習の計画を立てた。表現領域と鑑賞領域を融合させた、その効果を明らかにする。

以上の3回の実践を通して、筆者の授業者としてのカリキュラム・マネジメント能力の向上や授業観の変容を、実践記録、省察記録等を対象に分析して明らかにする。

3 「フーガ ト短調」を教材とした授業分析

実践Ⅰ「魔王」、実践Ⅱ「フーガ ト短調」、実践Ⅲ「名づけられた葉」の3つの実践のうちの実践Ⅱ「フーガ ト短調」を対象に、生徒の主体的な学習活動がどのように取り組まれていたのかについて、具体的に分析を行う。

3-1 グループ活動における音楽の要素の学習について

「フーガ ト短調」の第1時のグループ活動のA組2班、A組4班、B組2班、B組5班の生徒一人一人の発話の分析を行った。すべての発話を見ていくと、音楽の〔共通事項〕のうちの「音色」「リズム」「速度」「旋律」「強弱」「形式」「構成」が抽出された。さらにグループの発話のプロセスを見ていくと「Ⅰ：音色に関する議論」「Ⅱ：リズムに関する議論」「Ⅲ：速度に関する議論」「Ⅳ：旋律に関する議論」「Ⅴ：形式に関する議論」「Ⅵ：構成に関する議論」の6つのカテゴリーに分類が可能となった。また、課題解決に向けた話し合いを始めるための発話を「Ⅶ：話し合いの準備」、特徴を短冊に書くための発話を「Ⅷ：短冊に記入するための作業」、直接、課題解決に向けた話し合いには関係しない発話を「Ⅸ：その他」のカテゴリーに分類できた。

表3-1は、A組4班のグループ活動を要約したもの的一部である。A組4班は、「V：形式に関する議論」(16分30秒)について多く話し合いが展開された。次に「IV：旋律に関する議論」(8分30秒)、さらに「I：音色に関する議論」(2分30秒)や「III：速度に関する議論」(30秒)、「VI：構成に関する議論」(3分)についても話し合いが展開されていた。グループ活動の導入場面では

表3-1 A組4班の発話の要約

時間	カテゴリ	ラベル	発話
2'13	IXその他	雑談	2B: なんかも、あれドラクエのラスボスとかさあ
		再生①	
3'38	V形式①	形式	24C: え、けこう繰り返されてるイメージとかあったけど、全然なかった?
		雑談	26A: なんかも、これ聴いてると呪われそうで怖いね
5'28	I音色	形式	38C: なんかも終わらそうで終わらなくなかない?
		音色	43C: え、だから中間とかあんま怖くない?
		雑談	49C: ティチャーこいや!
6'51	V形式②	再生②	
		雑談	50A: あー(笑い)
7'49	I音色	形式	56C: え、なんかも、ここもなんかも、こと同じかなあって思ったんだけど
		音色	66C: え、ここあんま怖くない?
		同意	67A: こっちはなんかも普通
		音色	68B: 中間、あんま怖くない
10'32	III速度	形式	77C: ねえ、最初にもどってねえ?
		再生③	
		形式	84C: なんかも、この音何回も言ってるら
		形式	87A: 何回もくりかえされてる
		同意	88B: ね、
10'51	IV速度	速度	92C: ふつうにさ、ふつうにさ、速くない?
		同意	93A: 速い? ああ、確かに。なんかも、間がない。間隔が。
11'50	IXその他	雑談	95C: あー、混ざる。あー
		雑談	101A: 夜中も聴いたらなんかもだめだね
12'28	IV旋律	旋律	103A: この歌ってなんかも音程と
		旋律	104C: 高い音ー
		奏法	108C: え、オルガンでしょ? バイブオルガンでしょ。足ふみふみでしょ
		再生④	
13'10	IXその他	雑談	112A: なんかも入っちゃいけないとこに入っちゃ気がした。
		雑談	118C: (主題歌う) なんかもすげー 急な上がりだよこれが
13'44	IXその他	確認(楽譜)	121C: こっちは
		確認	123B: おー
14'31	IXその他	確認	123B: おー
		形式	131B: なんかも繰り返されてるよね

表3-2 B組5班の発話の要約

時間	カテゴリ	ラベル	発話
1'07	再生①	形式	8A: はじめの、リズムが何回もある
		形式	16A: こっちは、同じじゃない?
4'15	再生②	確認(楽譜)	26B: こことここなんかも、一緒なんだった。音程は違うけどってゆうまが言ってた
		確認(楽譜)	30C: あ、ここまですか
		確認(楽譜)	43A: こっちは
		確認(楽譜)	48C: こっちは全部一緒だった
4'46	再生③	形式	50A: 何回くり返してる?
		再生③	
5'35	再生④	旋律	55A: 2回目からあれでしょ、1オクターブ低いでしょ?
		再生④	
5'49	再生⑤	形式	60B: 前からここでも、前の音程からさあ、足とかみだりて同じと繰り返してただけだからさあ、違っかけてるだけだよ
		再生⑤	
6'14	再生⑥	作業	64B: こっちは線引いて、引いて引いて
		再生⑥	
7'00	再生⑦	確認(楽譜)	68A: え、こっちはこと、こっちはこと
		再生⑦	
7'20	再生⑧	形式	91A: え、これはくり返してないの?
		形式	98B: あ、ここだ、ここもまたスタートしてるから、こっちは全部繰り返すから、こっちはまたどっかで繰り返したよ
8'08	再生⑨	確認(楽譜)	106B: あ、聴いて、2分ほどはもう一回も聴いたらさあ、こっちはこと、こっちはこと、ちよと聴いてない?
		再生⑨	
8'32	再生⑩	確認(楽譜)	108C: あ、こっちは違くなる
		再生⑩	
9'07	再生⑪	同意	117B: ほんとだ
		再生⑪	
9'31	再生⑫	確認(楽譜)	135B: こっちが右の手で、こっちが左手?
		再生⑫	
10'48	再生⑬	再生⑬	
		再生⑬	
11'11	再生⑭	確認(音源)	160A: これ、ここ、今流れてんじや、ここが
		再生⑭	
11'40	再生⑮	操作	166C: また1回最初から流す?
		再生⑮	
11'51	再生⑯	再生⑯	
		再生⑯	
13:20	再生⑰	確認(楽譜)	170A: こっちは
		再生⑰	
15:25	再生⑱	確認(音源)	177C: もうすぐ終わる
		再生⑱	
17:44	再生⑲	形式	209A: うん、じゃあこの同じのは計何回あるの?
		再生⑲	
17:50	再生⑳	作業	212B: 聴いて、えっと、この一部だけ、あの、聴き直さなきゃ、この歌は、聴き直さなきゃ
		再生⑳	
22:27	再生㉑	確認	289B: あとなんかもあるかなあ、このくり返し以外の、なんか
		確認	395A: なんて書く?
23:32	再生㉒	形式	308B: 同じところを繰り返す、やつが、2種類あった、でいいかな
		確認	310A: 2種類なの?
24'56	再生㉓	形式	315B: 2種類、えっと、くり返す、リズム、が、あった。良くない?
		確認(楽譜)	324C: 1 2 3 4 5 6 7、こことここまで一緒だよ
		確認(楽譜)	326A: ねえ、3パターンになってない?
		確認(楽譜)	335A: ねえこっちはさあ、こっちはこっちはあつたらこれいらなくないか?
29'04	再生㉔	作業	344A: ねえまとめる? どうまとめる?
		確認(楽譜)	372C: あー、あったあったこっちは
29'14	再生㉕	確認(楽譜)	376C: だからこっちはパターンになっちゃやうから、もう1回減らす?
		確認	407B: くり返してのは分かった
29'35	再生㉖	雑談	409B: そうだよ、繰り返しのやつしか見つからないからさ、他のやつで聴いた方がよくない?
		雑談	410A: 強弱とか
29'35	再生㉖	雑談	413C: これ1個だけじゃないと思うんだけど
		再生㉖	

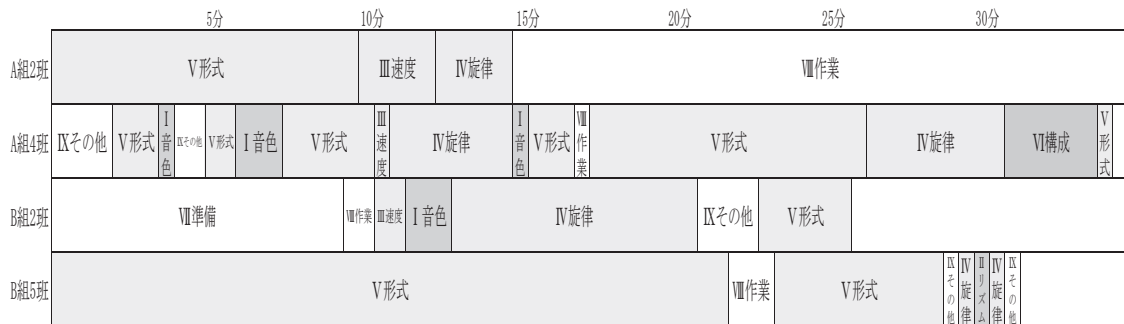


図3-1 グループ活動の話し合いの流れ

は、曲の構成を「なんか終わりそうで終わらない」と漠然とした感覚で捉えていたが、再生回数を重ね、楽譜で確認しながら聴くことで、楽曲を包括的に捉えて「音色」や「速度」、「旋律」の話し合いを通して「形式」についての学習がなされたことがわかった。

また、表3-2は、B組5班のグループ活動を要約したものの一部である。B組5班は主に、「V：形式に関する議論」について話し合いが展開された。グループ活動時間の大半が「V：形式に関する議論」(27分30秒)、その後、「IV：旋律に関する議論」(1分)、「II：リズムに関する議論」(30秒)について話し合いが行われた。「V：形式に関する議論」で、主題を「同じ」「何回も」「一緒」「くり返す」「種類」「パターン」という言葉を使いながら特徴としてまとめていく中で、楽曲の特徴である「形式」について追究が行われた。

以上のことからA組4班とB組5班は、本単元でのねらいである音楽の要素について議論が展開されていたと考えられる。

加えて、各グループ活動の発話の特徴を見てみると、様々な視点から問題解決的な学習を行っていることがわかる(図3-1)。全てのグループで「V：形式に関する議論」はされているものの、「形式」について話し合う過程は様々である。A組4班は「形式」や「音色」、「速度」、「旋律」について話し合いを行っていく中で、少しずつ「形式」について充実した話し合い活動が行われていった。また、B組5班は、「形式」について時間をかけて話し合われており、様々な言葉を使いながら言い換えることで「形式」を追求していった。A組2班は、グループ活動の最初に「形式」について話し合った後、他の音楽の要素について議論していったが、その後は作業にとどまってしまった。さらにB組2班は、「速度」や「音色」、「旋律」と共に「形式」についての話し合いも行われたが、短い時間だったために話し合いの中味が拡散していた。

以上のことから、A組4班とB組5班は「形式」に関して、話し合いの中味に関して様々な要因から進展されていったために、質的に充実した話し合い活動が行われていたと考えられる。さらに、「音色」、「リズム」、「速度」、「旋律」、「形式」、「構成」の具体的な中味に関して、グループごとの時間の集計を示したものが表3-3である。「V：形式に関する議論」についてA組4班は16分30秒、B組5班が27分30秒と、多くの時間議論された。グループ活動が開始されてから比較的早い段階で「繰り返されている」や「(初めのリズムが)何回もある」という曲の特徴に気づいていることから、形式について多くの時間議論されたと考えられる。

表3-3 グループ活動のカテゴリー別時間の集計

	A組2班	A組4班	B組2班	B組5班
I：音色に関する議論	0	2分30秒	1分30秒	0
II：リズムに関する議論	0	0	0	30秒
III：速度に関する議論	2分30秒	30秒	1分	0
IV：旋律に関する議論	2分30秒	8分30秒	8分	1分
V：形式に関する議論	10分	16分30秒	3分	27分30秒
VI：構成に関する議論	0	3分	0	0

つまり、「「フーガ ト短調」の特徴を見つけよう」という問口が広い課題を設定したことが、各グループにおいて、先に曲を聴いて課題を追究したり、曲を聴きながら色々な音楽の要素に触れながら課題追究をしたりと、様々な様態で課題を追究することにつながった。様々な方法で課題追究を行ったことが、音楽に関する要素を見出す深い学びにつながっていったことが確認できた。

3-2 グループ活動の曲の再生に関する発話分析

約35分間のグループ活動時間の発話内容から、タブレット端末を用いて曲を再生している時間と回数を比較し分析を行った。表3-4は、グループ活動時の曲の再生回数と再生時間と再生に関する発話である。A組2班は、曲を最初から最後まで聴いてから話し合いを行うという繰り返してグループ活動を行っており、再生回数は6回であった。A組4班とB組2班においては、一度全員で曲を聴いた後、議論していく中で気になったところや確認したいところを何度もくり返し再生し、部分再生を含めて10回以上の再生を行っている。また、B組5班は最初に曲を聴いた後、再生をしながらも楽譜を中心に特徴を見つける活動を行っており、5回目の再生ではその特徴の確認として再生している。

表3-5に示したように、通常の授業では教師主導で曲を流すために3回程度の再生に留まるが、今回の方法を取り入れたことによって、平均8.5回の再生回数と約21分間の再生時間が生まれた。さらに1時間の授業として捉えると、授業の導入場面とまとめの場面に全体で2回鑑賞しているため、これまでの通常の鑑賞授業と比較しても、再生回数は格段に増えていることがわかる。

つまり、これまでは教師の一方向の操作により、3回程度しか再生することができなかったが、今回は、生徒の自分たちの聴きたい部分や、探究したい内容に応じたタイミングで課題解決のために主体的にタブレット端末を再生することができた。その結果、平均8.5回の再生回数が生まれ、最短で13分、最長で33分の平均21分間再生を行い、探究するという活動に変わった。生徒の探究する内容に応じて部分的に聴いたり、最初から繰り返して聴いたり、必要に応じて工夫して聴き分けるという主体的な学びや深い学びにつながっていったと考えられる。また、聴きたいところをすぐに聴けることが課題追究過程において重要であり、それが学習を深化させることにつながったことから、タブレット端末の活用の有効性を確認することができた。

表3-5 グループの曲の再生回数と再生時間の合計

	A組2班	A組4班	B組2班	B組5班	平均
再生回数	6回	10回	12回	6回	8.5回
再生時間	20分	33分	19分30秒	13分	21分
特徴	曲を最初から最後まで聴いてから話し合いを行う。	話し合いの内容に応じて再生しながらも、活動中は常に繰り返し再生を行う。	一度曲を聴いた後、確認のために部分再生を行う。	一度曲を聴いた後、繰り返し再生をするが、楽譜に注目して話し合いを行う。	

4 総合考察

4-1 生徒の主体性・協働性を引き出す音楽科における鑑賞授業の実践に関する自己省察

アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた3回の鑑賞授業の開発、実践を行った結果、筆者の授業者としての変容が起きていたことがわかった。生徒の主体性・協働性を引き出す音楽科における鑑賞授業の実践に関する自己省察について整理したものが表4-1である。これ以降の文末の数字は、表4-1の自己省察の該当する部分である。

例えば、これまでの授業実践では、楽曲について生徒がどう解釈していくのかではなく、指導書に書かれている内容を生徒に伝えることを重視していた(①)。そのため、教師主導の授業展開となり、鑑賞の授業でありながら、楽曲の再生回数も3回程度であった(②)。

実践Ⅰ「魔王」では、ICTや、ホワイトボードの活用によって生徒の主体性を引き出すための学習環境の重要性を確認した(③)。主体的に課題解決を行っていく生徒の姿から、対話を通して自分の考えをまとめていく姿を見ることができた(④)。また、課題解決学習の設定によって生徒の活動時間の十分な確保が必要であることがわかった(⑤)。さらに、教師主導の授業が生徒主体の視点に変わった(⑥)。

実践Ⅱ「フーガ ト短調」では、授業の導入場面での教師の解説を基本的な内容にとどめ、課題解決学習の時間を確保した(⑦)。楽譜が読めない生徒も、繰り返し曲を再生することで、楽譜から視覚的に「主題」を捉えることができ、教師の説明が無くても課題や課題解決に適した資料があれば、生徒は主体的に問題解決に取り組むことを確認できたことから、問題解決をしていく意義を見出した(⑧、⑨)。さらに、第2時の最初の15分間を前時の振り返りの時間に設定したことで生徒が学習を思い出すことにつながった(⑩)。また、「魔王」の実践で活用したホワイトボードは短冊に変更したことで、全体でのまとめがしやすくなり、音楽の要素と結び付けることが可能となった(⑪)。そして、生徒主体の授業の視点の中で、生徒を見取る時間が増えたことから、教師の支援方法の在り方を考えるようになった(⑫)。

実践Ⅲでは、鑑賞領域と表現領域を位置付けた混声3部合唱「名づけられた葉」を行った。これまでの合唱授業の展開が、課題解決学習を設定したことによって曲の理解を深めることにつながり、授業展開が改善された(⑬)。生徒は議論の過程でタブレット端末から必要な音源を選択して課題追究し、グループで対話を通して課題解決を行っていたことから、深い学びにつなげるためには個ではなく、対話を通して学習することが必要だということを確認できた(⑭、⑮)。また、実践Ⅱの「フーガ ト短調」で成果のあった短冊を活用し、全体でまとめた結果をワークシートで共有したことが、生徒の学びを共有することにつながり、その後の学習に生きていったことから、改めて学習環境の重要性を確認できた(⑯)。さらに、この実践を通して歌唱以外の器楽や創作の分野においてもアクティブ・ラーニングを取り入れた授業について考えるようになった(⑰)。

筆者の「音楽の価値観」は、実践Ⅰ「魔王」を通して、これまでの教師主導の一方的な授業形態から、生徒が主体的に活動する学習形態へ変化した(⑱)。さらに実践Ⅱ「フーガ ト短調」で、最終的に鑑賞は個人でするものだと思っていた固定概念が、実践を通してグループで鑑賞することの効果に気づくことができた(⑲)。その結果、実践Ⅲでは、鑑賞領域と表現領域を融合させたことによって学習内容が整理され、効率的で効果的な授業展開を実践しようという気持ちに変化した(⑳)。

実践を重ねることによって生徒の動きや表れが見えるようになっていった。また、課題を踏

表4-1 生徒の主体性・協働性を引き出す鑑賞授業の実践に関する自己省察のまとめ

	これまでの実践	I「魔王」	II「フーガ ト短調」	III「名づけられた葉」
教材について	・楽曲を、生徒がどう解釈していくのかではなく、教師が生徒に教科書に書かれている内容を伝え、理解させることに重点を置いていた。(①)	○歌詞の情景と曲想の関わりを感じ取りやすく、ピアノ伴奏もその情景をさらに引き立てて表現している楽曲である。詩と音楽の関係を読み解いていくことで楽曲を理解し、深く味わいながら聴くことができる。	○パイプオルガンの重厚な響きと、曲の構成を捉えやすい曲であるため、音楽を聴きながら楽譜を活用することで主題を視覚で捉えることができる。その結果、生徒の主体的な活動につながった。	○詩の内容の高まりに合わせて曲全体が盛り上がり、自分の思いと重ね合わせて歌うことに適している教材。 ○校内音楽発表会の曲という生徒の身近な題材であったことが、主体的な活動に展開した。
		⇒これまでに20回以上の実践を行っているが、教材についての視点の変化は生まれていない。		
授業展開と構成方法	学習環境	○タブレット端末、ラミネートした拡大楽譜、日本語訳の詩の活用によって、生徒の主体性が引き出された。 ○ホワイトボードの活用によって生徒の意見が外化され、グループで共有することができた。 ▼グループの意見を全体でまとめる時には、ホワイトボードから短冊に変更し、意見を統合しやすくなる必要がある。	○タブレット端末を活用することによって多くの再生回数が生まれた。 ○まとめて短冊を活用したことで特徴が統合しやすくなった。(①) ▼グループの意見を短冊に記入して全体でまとめた結果を、その後の活動につなげるためにもワークシート等での確認が必要。	○短冊の活用と全体でまとめた結果をワークシートに載せて全体で共有したことが、曲の特徴をおさえることにつながり、パート練習の計画づくりに生かされた。(⑥)
	授業構成	○15分間の生徒の課題解決場面を設定したことで、課題解決には十分な時間の確保が必要であることがわかった。(⑤) ▼第2時の授業が1週間後という状況から、思考を止めないために授業構成を見直す必要がある。	○課題解決の時間を重視し、第2時の最初の15分間をグループ活動に設定し、導入場面での教師の解説を減らしたこと から多くの活動時間を確保でき、教師の生徒の見取りの時間が増えた。(⑦、⑩) ▼全体のまとめの場面の後、もう一度グループや個人に戻り、課題について考える時間を設定することで深い学びにつながっていく。	○8時間構成のうち、2時間を鑑賞に位置付けることで楽曲の解釈をする時間が生まれた。 ○グループとパートで課題解決学習を行ったことで、楽曲の構成や歌詞と音楽の関係を追究することができ、また、パート同士の関係を考える等、楽曲の理解が深まった。 ▼全体でのまとめをクロストークで行うことで、さらに深い学びにつながる可能性がある。
	生徒への対応	○教師はグループの状況を把握しているようで、支援のタイミングによっては生徒の思考を止めてしまうこともあることがわかった。 ▼主体的な活動を促進するためにも、教師は必要な場合のみ支援を行う。	○楽譜が読めず、意欲が喚起されなかった生徒には、楽譜の前半部分に注目させ、音符の流れ(書き方)が同じ部分や似ている部分を探そうに支援した結果、楽譜を視覚的に捉えて課題追究していくことができた。	○学習の流れ(第1時:グループ、第2時:パートで特徴を見つける)を示したことが、生徒が学習の見通を持つことにつながった。 ▼練習計画を立てる際の技術面の練習方法については、教師の支援も必要な場合がある。
		⇒教師主導の授業形態で、教科書の内容を伝えることを重視していた。	⇒生徒の主体性を引き出すための学習環境の重要性を確認した。また、教師主導の授業が生徒主体の授業の視点に変わった。(③、⑥)	⇒鑑賞を表現に位置付けたことで、これまでの合唱の授業内容の展開が改善された。他の分野においてもアクティブ・ラーニングを取り入れた授業について考えるようになった。(⑬、⑰)
生徒の表れ	課題追究	○楽曲を聴いて感じたことや思ったことを、基本的には生徒個人で追究し、その後、周りの友だちと意見交換を行った。	○課題追究場面において、「形式」や「構成」について知っている言葉(輪唱など)を使いながら楽曲の特徴を導き出した。 ○グループの発話から、「音色」や「形式」にとどまらず、「リズム」や「旋律」など様々な音楽の要素に触れながら議論していった。	○グループの課題追究場面において、対話を通して詩と音楽の関係を読み取っていることから、個ではなく、対話することの大切さを実感した。(⑮) ○課題解決のための時間を多く設定したことで、生徒一人一人が楽曲とじっくり向き合い、課題解決に向けて取り組むことにつながった。
	学習環境	・個人用の楽譜とワークシートの活用。	○タブレット端末を活用したことによって、生徒は自由に繰り返し聴くことを通して、楽譜と音楽から根拠をもって適切な言葉で表現することができた。	○生徒は議論の過程でタブレット端末から必要な音源を選択し、課題追究をすることができた。(⑭) ○拡大楽譜の活用により、グループで一つの楽譜に注目し、考えを共有できた。 ○繰り返し何度も曲を聴いたことで、合唱練習に入る時にはほとんどの生徒がメロディーを覚えており、スムーズに練習に入ることができた。
		⇒個人で鑑賞することが中心であったため、楽曲を深く理解するところまでには至らなかった。	⇒ICTの活用とグループ活動の設定によって、主体的に課題解決を行う生徒の姿から、これまでの授業が教師主導で展開されていることに気づいた。(教師の発言の多さ)	⇒ICTの活用を通して、生徒の問題解決の多様性を確認できたことから、問題解決をしていく意義を見出した。
実践後の課題	・指導書ベースの授業展開から、生徒が主体的に問題解決するような授業構成への転換。 ・ICTの活用により、生徒が主体的にくり返し聴く活動を通して課題解決をしていく場面の設定。	・音楽の要素の定着が図れていないことから、日頃の授業においても課題解決場面を意識した授業づくりが必要。 ・グループのメンバー構成によって活動内容も様々ため、全体でのまとめ方に工夫が必要。 ・じっくり考えるためのグループ活動時間の確保のため、教師の導入場面での説明は可能な限り少なくする。	・生徒の思考が途切れないためにも2時間続きの授業時間設定が望ましい。 ・グループから出された特徴の全体での統合の方法について、全体のまとめの後にもう一度考えさせることが深い学びにつながっていく。 ・課題追究の時間を十分に確保するため、導入場面での教師の説明は最小限にとどめる。	・拡大楽譜と個人用の楽譜、歌詞など、資料が多く、グループ活動が個人での学習に展開したため、資料が必要最低限にとどめる。 ・教師の支援について、グループ活動の状況を把握しながらも、場合によっては生徒の視点を変えることも必要である。
価値観	・曲を聴かせて曲の説明(ポイントを示す)をし、感想を書かせる授業のため、教師主導の授業形態。	・曲を聴かせて説明し、感想を書かせる一方的授業形態から、生徒が主体的に活動する学習形態への変化。(⑱)	・鑑賞は個人でするという固定概念から、グループで鑑賞することの効果に気づく。(⑲)	・表現領域の歌唱(合唱)に鑑賞を位置付け、鑑賞の視点で課題追究した結果、楽曲理解が深まり、効率的な学習内容に変化する。(⑳)

※成果や気づいた点を○、課題や修正点を▼とした。

まえて改善を重ねることで自分の授業が客観的に見えるようになり、授業の意義が深まってくることがわかった。この単元開発により、自分の教材観、生徒の主体的活動の意義、授業展開・構成方法から、自分の音楽科における鑑賞授業の価値観が大きく変化していった。

4-2 3つの実践によるカリキュラム・マネジメント能力の向上

これまでの実践と省察を踏まえて、単元展開の構想図を整理したものが図4-1～図4-4である。

図4-1に示したのは、これまでの筆者自身の鑑賞授業の単元展開の構想図である。これまでの鑑賞の授業は、教師対生徒の一对一で、教師主導の授業が展開されていることが多かった。一斉に楽曲を聴いて感想を書かせ、その後、教師が楽曲の説明を行い、本時の課題について考えさせ、まとめとしてもう一度DVDを鑑賞するという途切れ途切れの展開であった。この授業展開では、教師の一方的な説明に終始してしまい、多くの生徒は受け身の状態のまま授業が行われるため、生徒の主体性を引き出す授業が展開することは難しい。そこで、今回開発したICTを活用したアクティブ・ラーニングを取り入れた授業では、一斉にDVDを鑑賞した後、各グループが課題を設定し、楽曲の特徴を見つけるためにグループでタブレット端末を自由に再生し、その解決に向けて活動に取り組んだ。

図4-2は実践Ⅰ「魔王」の単元展開の構想図である。グループで繰り返し自由に曲を聴きながら、詩と拡大楽譜を活用し、詩と音楽の関係を対話しながら追究し、気づいたことをホワイトボードにまとめていく方法を取り入れた。その結果、グループでは6回から12回程度、繰り返し音楽を再生し、課題解決に向けて音楽の要素を見つけ、主体的な学習へとつなげていた。生徒の中に主体的に課題が設定され、問題解決のための学習が展開されていき、全体で共有することにつながるという主体的な活動に変化していった。

図4-3は実践Ⅱ鑑賞曲「フーガ ト短調」の単元展開の構想図である。導入場面での教師の楽曲の解説を無くし、グループ活動時間を十分に確保した。また、グループで討議された内容の可視化をホワイトボードから短冊に変更した。これによって各グループから出された特徴を同じ内容ごとにまとめやすくなり、音楽の要素や「形式」との関係も視覚的に捉えやすくなった。さらに、授業後に宿題として紹介文の作成を位置付けて評価を行った。

図4-4は、鑑賞領域と表現領域を有機的に位置付けて開発した、混声3部合唱「名づけられた葉」の単元展開の構想図である。実践Ⅰと実践Ⅱの鑑賞授業での効果を実感したことから、実践Ⅲでは表現領域の合唱に鑑賞を取り入れた「名づけられた葉」の単元開発を行った。実践Ⅲでは、8時間構成の内の最初の2時間を鑑賞とし、残りの6時間を表現とした。最初の2時間の鑑賞では、グループとパートで楽曲の特徴を見つける活動を行い、その後、特徴をもとにパート練習の計画を立てさせた。さらに、その練習計画をもとに練習を行った。鑑賞領域と表現領域を融合させた単元構想を考えることによって、曲の解釈の時間が生まれ、楽曲の理解がさらに深まっていったと考えられる。

アクティブ・ラーニングを取り入れた単元構想を考えることによって、能動的な学びと対話的な学びが生まれた。また、タブレット端末と拡大楽譜を活用することで、音楽を形づくっている要素とその働きを視点で捉えることにつながった。さらに、楽曲の特徴を見つけ出すという問題解決学習を行うことから、概念的な理解も含めて深い学びにつながっていった。

以上のことをまとめると、教師主導の一斉授業の形態から課題解決学習を取り入れた授業展

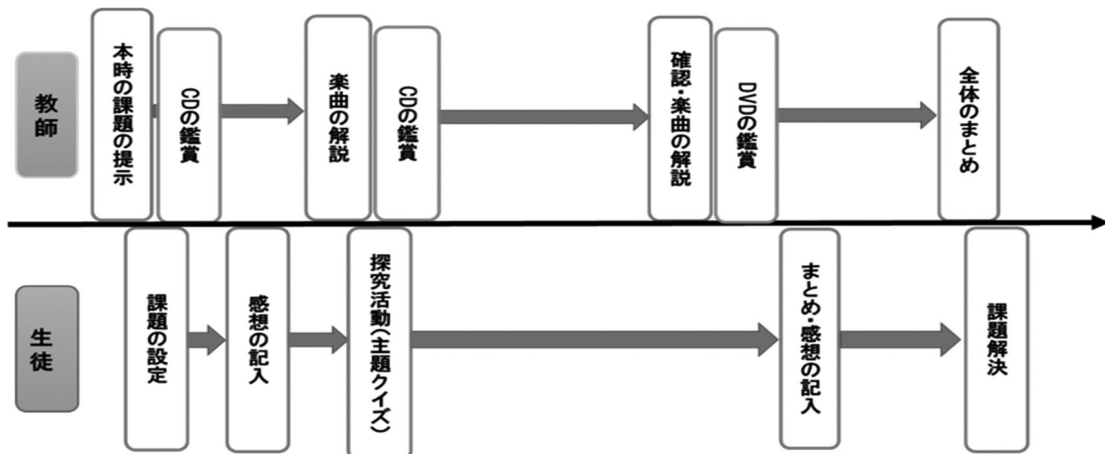


図4-1 これまでの鑑賞授業の展開

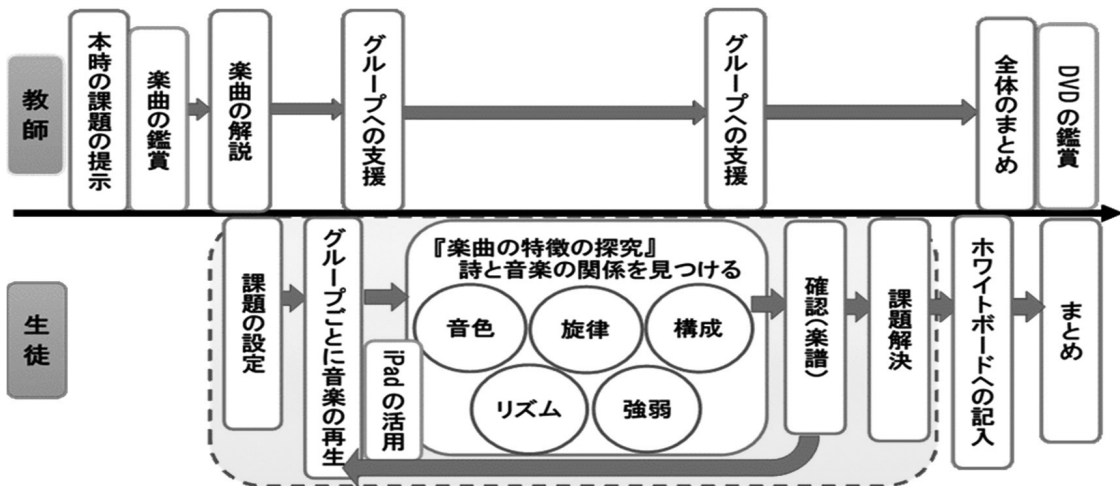


図4-2 鑑賞曲「魔王」の単元展開の構想図(実践Ⅰ)

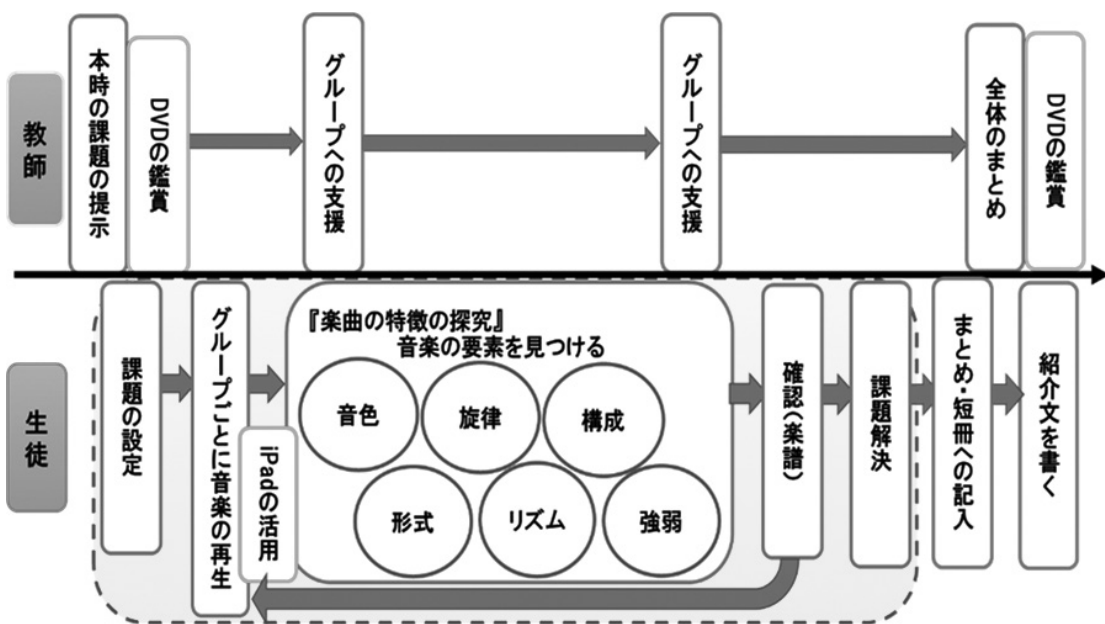


図4-3 鑑賞曲「フーガト短調」の単元展開の構想図(実践Ⅱ)

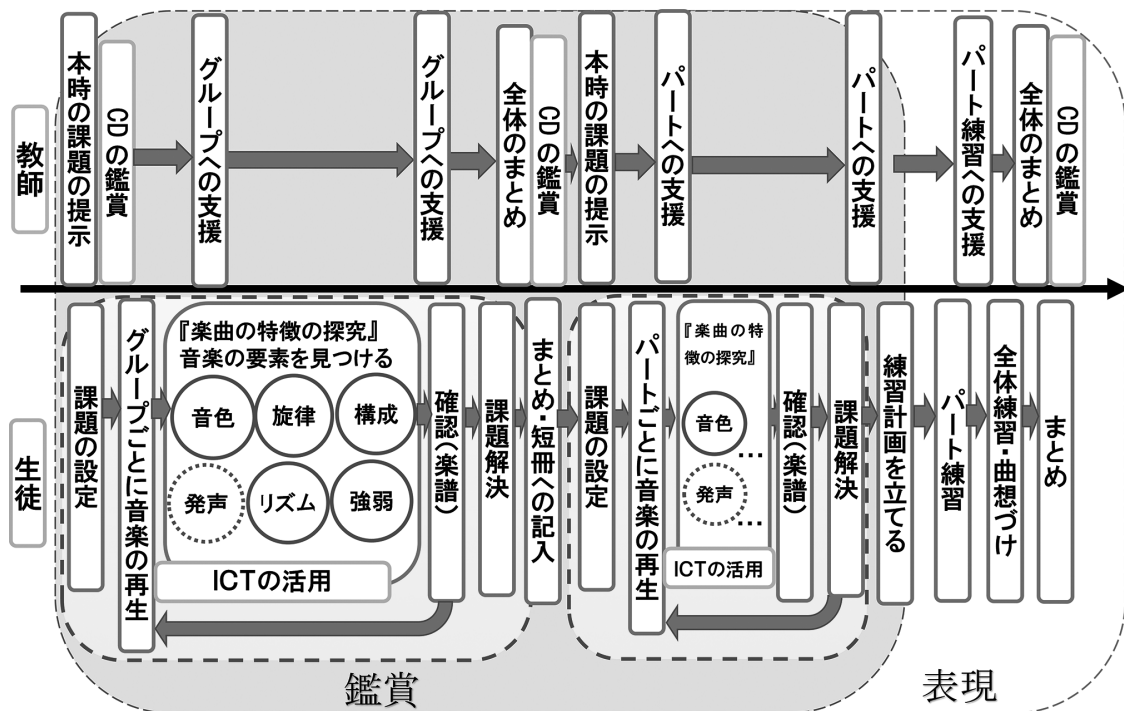


図4-4 混声3部合唱「名づけられた葉」の単元展開の構想図（実践Ⅲ）

開に変換し、課題追究の時間を重視するために教師の発問の時間を少なくしたり、グループの考えを短冊に可視化したりするなど、生徒の状況に応じて生徒が主体的に学習するための方法に進化していったことが確認できた。さらに鑑賞領域に表現領域を位置付けるという有機的に実践を関連づけ、効果を高めるといふ単元開発にまで至った。以上のことから教科における単元開発に関するカリキュラム・マネジメント能力が向上していると捉えることができる。

5 本研究のまとめ

生徒の主体性・協働性を引き出す音楽科における鑑賞授業のアクティブ・ラーニングのデザイン原則を表5-1に示す。

生徒の主体性・協働性を引き出す鑑賞授業のデザイン原則をまとめると、「単元の構成と展開」と「学習環境」について大きくまとめることができる。

「単元の構成と展開」については、課題の設定の在り方、構成方法そして、領域間の関連が必要である。1つ目の課題設定の在り方においては、課題が高く、多様な考えを引き出せるような課題であることが重要である。2つ目の構成方法においては、主体的な活動時間の十分な確保が必要である。また、3つ目の領域間の関連においては、鑑賞領域と表現領域の有機的な関連を図ることが大切である。

「学習環境」については、グループ活動の設定、思考を深めるツールの位置付け、意見を可視化するツールの位置付けが必要である。1つ目のグループ活動の設定においては、対話を活性化させるための3～4人程度の構成、さらに、グループには音楽を得意とする生徒を割り当てることも大切である。2つ目の思考を深めるツールの位置付けは、タブレット端末の活用が重要であり、3つ目の意見を可視化するツールの位置付けは、短冊やラミネートした拡大楽譜の活用が大切である。

表5-1 生徒の主体性・協働性を引き出す鑑賞授業のデザイン原

単元の構成と展開
<ul style="list-style-type: none"> ○課題設定の在り方 <ul style="list-style-type: none"> ・課題が高く、多様な考えを引き出せるような課題 ○構成方法 <ul style="list-style-type: none"> ・主体的な活動時間の十分な確保
<ul style="list-style-type: none"> ○領域間の関連 <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞領域と表現領域の有機的な関連を図る
学習環境
<ul style="list-style-type: none"> ○グループ活動の設定 <ul style="list-style-type: none"> ・対話を活性化させる3～4人程度の構成 ・音楽を得意とする生徒を割り当てる ○思考を深めるツールの位置付け <ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末の活用（ICTの活用） ○意見を可視化するツールの位置付け <ul style="list-style-type: none"> ・短冊やラミネートした拡大楽譜の活用

以上のことが、生徒の主体性・協働性を引き出す音楽科における鑑賞授業のデザイン原則であるとまとめることができる。

今回、音楽科の鑑賞領域と表現領域を有機的に位置付けた単元を開発し、実践を行って効果があるということは予想できたが、具体的な分析までには至らなかった。今後はその分析から効果的な在り方を検証していかなければならない。さらに、各学年の系統性を意識した表現領域における単元開発や、表現領域の器楽や創作の分野においても鑑賞領域と関連させた単元開発を行っていきたい。併せて、ICTを学びの過程でどう活用させていくのかについて検証していくことが必要であり、カリキュラム・マネジメント能力を高めていきたい。

引用・参考文献

阿部 昇 (2016)『確かな「学力」を育てるアクティブ・ラーニングを生かした探求型の授業づくりー主体・協働・対話で深い学びを実現するー』明治図書出版

河添達也, 多賀秀紀 (2009)「中学校音楽科における領域横断型カリキュラム開発」日本学校音楽教育実践学会 島根大学教育臨床総合研究 8, 153-166頁

国立教育政策研究所 (2010)「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」

岡田暁生 (2009)『音楽の聴き方 聴く型と趣味を語る言葉』中公新書

松下佳代 (2015)『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房

宮下俊也, 阿部みどり (2012)「中学校音楽授業における〔共通事項〕の指導方法に関する実践的研究」奈良教育大学紀要 第61巻 第1号 215-226頁

溝上慎一 (2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂

文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社

文部科学省 (2016)『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』中央教育審議会 教育課程企画特別部会

- 森橋和也, 菅千索 (2009) 「中学校における音楽鑑賞教材の選択についての実践的検討」 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 第19巻 39-46頁
- 森本菜奈視, 河添達也 (2014) 「「表現 (創作)」と「鑑賞」の一体化をめざした教材開発の実践的研究」 島根大学教育臨床総合研究 13, 63-76頁
- 西村恵子 (2016) 「小学校音楽科におけるアクティブラーニングの考え方ー学習活動例の類型化と実践例の分析ー」 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第48号 31-41頁

Development of a course unit introducing active learning and improvement of curriculum management ability
– Junior high school music appreciation class –

Aiko KOBAYASHI, Yasuyoshi ISHIGAMI

Abstract

The study aims to develop a curriculum incorporating active learning for a junior high school music appreciation class, and to improve the curriculum management ability of the user through practice. Through repeated analysis and practice at a course unit level, the method of constructing teacher-led course units was modified to a method of constructing course units where problem solving was student based. We confirmed that the curriculum management ability of the user improved.

Keywords: music appreciation class, active learning, development of a course unit, curriculum management ability,